

いずみさの昔と今 第343回

「浮世絵師

葛飾北斎」

浮世絵とは、現在の世の中の「浮世」を表した絵であり、当時の流行を非常によく表した絵画です。大衆が流行の情報を広く求めるには、手書きという手法では追い付きません。そこで大量生産が可能な版画（刷物）という手段になります。当初は黒一色の墨摺絵でしたが江戸時代中期頃から「錦絵」と呼ばれる多色摺の浮世絵が流行します。当初は高価であり商人や旗本といった上流階級のものでしたが、後期になると技術革新などにより安価な「錦絵」（浮世絵）が流通するようになりしました。かけそば一杯ぐらゐの値段が当時の相場です。

葛飾北斎（1760～1849）は江戸時代後期に活躍した浮世絵師で生涯90年という長さも相まって非常に多くの作品を制作しました。作品の多さもさることながら、そのスタイルも様々な流派の特徴を吸収し多彩なバリエーションの絵画を生んでいます。19歳の頃に浮世絵師の勝川春章（1726～1793）に弟子入りをしますが、それ以前に彼は木版彫刻を学んでおり浮世絵制作の習得は比較的早いと考えられます。当時の絵師・浮世絵師は入門した流派の絵画のみを継承し、他の流派を学んだりすることは、タブーでした。しかし彼は他の流派の絵を積極的に学び、それだけでなく西洋画の技法も習得します。浮世絵の他に読本の挿絵なども手がけました。また彼の作画の教科書のような「北斎漫画」など出版についても積極的に行ってきました。

さて、浮世絵は日本が生んだ絵画芸術ではありますが、主要な浮世絵師の作品について、研究者によっては、半分以上は日本にはなく海外に所蔵先があると考えられています。そのため日本よりも海外で浮世絵を目にする機会が多いことになりました。東アジア文化は17世紀に流行したシノワズリ（中国趣味・様式）があり、その中に日本文化も含まれていました。その後、海外へ日本の浮世絵・工芸品などがもたらされて以降、日本美術はゴッホなど多くの芸術家に影響を与えました。それがジャ



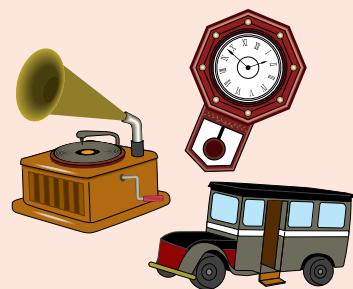
▲「東都浅草本願寺」
（大阪浮世絵美術館所蔵）

ポニズム（日本趣味・様式）で、19世紀後半、日本文化が初めて独自のものとして認識された瞬間でした。西洋画とは異なった画面構成、色彩、構図など西洋にはない絵画様式を備えた浮世絵は特にその影響は強いものとなっています。葛飾北斎の代表作「富嶽三十六景」は他の作品にもまして強い影響を与え、日本・西洋を問わず、また時代をも超越して強い影響を与えることとなります。今回、特別展で大阪浮世絵博物館のご協力のもと、「富嶽三十六景」の実物をみなさんにご覧いただきます。

泉佐野 レトロ タイムスリップ

泉佐野市の昭和頃の懐かしい写真を紹介します。

①泉佐野駅下側



▲時期は不明ですが、かなり古いころの泉佐野駅下側。路線バスの形状が現在とかなり違います。

▼平成元年ごろの泉佐野駅下側。駅舎の上から、駅上にあったデパートの看板が見えています。



▲現在の泉佐野駅下側。駅は高架となり、駅前雰囲気はかなり変わりました。

泉佐野市の懐かしい写真は「泉佐野市デジタルアーカイブ (<https://adeac.jp/izumisano-city/top/>)」でも公開中!